

よしあし

JAPAN OBOE CLUB

編集・発行 日本オーボエ・クラブ広報委員会
東京都豊島区西池袋3-25-2大晴ビル 楽西池店内
会報関係の連絡先

〒176 練馬区貫井4-16-10-601 猿田 博
郵便振替「日本オーボエ・クラブ」東京 9-89563

第5号 1988年11月1日発行

不許複製

第3回 総会報告

寒空の下を数万個のチョコレートが飛びかっていた去る2月14日、東京は池袋「梨しおり」にて第3回総会並びに新年会が催された。

出席者は正会員が20名、賛助会員が5名、これに委任状44通を加えて総会が成立し、まずN響の浜道晃氏が議長に選出され、以下のよう

1 各小委員会活動報告

それぞれの小委員会代表より前年度の活動や発生した問題点について報告が行われた。(詳しくは委員会報告欄参照。)

事務局 (高橋勇美氏)

「最大の活動は会員名簿の作成だった。事務能力の欠如が表れて来ており、特に事務所設置の必要を感じる。」

広報 (安原理喜氏) 「会報の遅れが目立ち申しわけない。編集能力に限りがあるもののほかに、資料・原稿類の所在がバラバラなのが大きい理由で、やはり事務所が無いことが敗因である。」

企画 (吉成行蔵氏) 「前年度は2回の交歓会を催した。次年度については、オーボエフェスティバルを企画したいと思っているがまだ具体的な段階ではない。開催にあたっては、役員のみならず会員の幅広い協力をお願いする」

推進 (似鳥健彦氏) 「未だプロ奏者の参加が少ない。アマチュアで事務的に有能な人に入ってもらうのも一案ではないかと思う

がそのためにも早くプロが団結すべきだ。」

2 会計報告

事務局会計の伊藤博氏より87年度会計報告が行われた。30人分位の会費未納があり対策が急がれる。また今後事務局設置や種々イベントがある場合にはそれらに補助していくことになるだろうとのことである(87年度会計報告欄参照)。

3 役員改選

運営委員計20名を選出し、その中で小委員会の人選については運営委員に一任した。また、今まで運営委員会に属していた会計監査2名を、今回から別わけて選出することになった(本年度新役員欄参照)。

4 質疑応答

質問は特に無く、この場で日フィルの熊田氏の近況報告がされた後(後述記事参照)、恒例の新年会にうつり、2時間ほどの間思ひ思いに歓談のひとつきを過ごした。(文責 高井美香)

《本年度新役員》

(大字は各責任者)

運営委員会 (計20名)

事務局

(書記) 高橋勇美

(会計) 安藤禎章

(総務) 伊藤博

小箆満理子、佐野直

樹、山本安洋

広報委員会

猿田博 伊藤正文、

高井美香、本間正史、安原理喜

熊田明宏さん 死去



日本フィルで活躍され、日本オーボエ・クラブの運営委員も務められた、熊田明宏(くまだ・あきひろ)さんが8月12日亡くなりました。45才でした。

熊田さんは1942年仙台生まれ。1968年東京芸大を卒業、その年10月に日本フィルに入団しました。1986年10月練習中に脳腫瘍で倒れ仙台で手術。療養の後、87年春にはオーケストラに復帰しましたが10月に再発。東北大医学部付属病院に入院中でした。

密葬は8月19日に本葬は8月21日にとりおこなわれました。

日本フィルと日本音楽家ユニオンの有志による、「熊田さんを偲ぶ会」は10月24日午後6時より、星陵会館(日比谷高校内)にて行われました。

企画委員会

斉藤勇二、市原満、

改田晃、後藤恵治、吉成行蔵

推進委員会

似鳥健彦、河野剛、

小島葉子、虎谷迦悦

会計監査(2名)

北島章、佐藤順子

企画委員会 から アンケートのお願い

現在日本のオーボエ奏者が使用している楽器やリードのことを知りたいという希望が会員の方々の中から多数でてきます。しかし、総会等の機会を利用して情報を得ることは容易でなく、ごく限られた範囲内しかありません。そこでオーボエクラブの方々の相互の情報交換のために役立てたいと考え、使用している楽器のアンケートを実施させていただきます。同封のハガキに現在ご使用になっている楽器のメーカー名、製造番号、システム、また、リードのスタイル等をご記入の上、5月末日までにご投函ください。(事情の許す範囲で結構です。特に希望する場合は匿名でも可。)ぜひ、御協力をお願い致します。P. S. 企画委員会へのご意見、ご要望などありましたら、どしどしお寄せ下さい。

推進委員会から

運営委員にも、少しづつ若い力加わり、遅い歩みかも知れませんが、地についた動きになって来たと思います。

推進委員会といたしましては、本年度も会員の拡充を計り、更には、アマチュアの加入が容易になる様な、会則や事務機構の充実を、推進したいと思います。

他の管楽器では行われているのですが、オーボエフェスティバルも、是非近い内に実現したい事の一つです。これはアマチュアや、業界からも大変希望されており、有名プレイヤーの演奏や合奏、難しいとされている、リードの削り方の易しい紹介、全員で合奏出来る様な曲の、委嘱等を考えているところです。



4月上旬、桜が満開の東京で久しぶりの都の風に吹かれてから、10日ぶりに札幌へ戻ってみると、北海道にもようやく遅い春が訪れていて、家の前の雪は消え、裏の空地には「ふきのとう」があちこちに顔を出していました。朝晩の冷え込みはまだ残っているものの、日中の暖かさは東京とあまり変わらない日もあり、この調子でいけば、5月の連休あたりには、例年のように、梅と桜とこぼしとつじが一斉に咲き揃うでしょう。

さて私は、その穏やかな陽気とは裏腹に、このところ毎日が困惑と安堵の繰り返しを送っているのです。というのも、実は、新しい楽器を手に入れたからなのです。新品の楽器の鳴りは堅く、音程はツボも今までとは違ってあたりまえ、でも別のよさがあると確信したからこそ新しい楽器に代

える決断をしたのです。しかし、その確信が時としてゆさぶられようとするところがあるのです。…今までの方がよかったのではないか…。そんな不安を振り払うかの様にトーンホールやキーの聞き具合にいろいろ手を加え、こっちをやっては戻し、あっちをやっては戻し、とうとう、上管と下管を20°～30°回転させて接続すると良くなることを発見。しかしこれも結局元に戻すことになりましたけど…。とまあ、こんな調子で時が経ってしまった訳です。誰でも新しい楽器を使いこなすのは、ひとすじ縄ではいかないものです。まして新しい楽器には別な可能性が秘められているという妄想がつきまとう限り、試行錯誤は何度となく繰り返されることになるのでしょう。それにしても、ここ数年間、出合う楽器との相性がいまひとつだった私としては、「ここで何かしたい!」という気持ちが、どうやら先走りしているようです。

熊ちゃんを 偲んで

N響 浜 道晃

熊ちゃんこと熊田明宏君との出会いは、東京が丁度今のソウルの様にオリンピックをあと数カ月後に控えた昭和39年の芸大受験の頃でした。色白で端正なマスクに当時はセルロイドでしたが厚縁のメガネをかけ、少女マンガの中の貴公子よろしく、貧乏人の集まりだった管打楽器専攻の我々にはキラキラと何とも眩く感じはしましたが、ひとたび口を開くと、「俺ってちゃんと標準語しゃべっているぞろ」と言うその音程は仙台ナマリそのものだし、身のこなしや、行動にも気取ったところが無く立派に田舎育ちだったので、もっと田舎者の僕にはなんとも頼もしく思えたものでした。1年のころは、リードにロングとショートがあること自体知らなかった僕は、それこそマンツーマンで削り方を教えてもらってことを昨日のこの様に思い出します。やがて僕はボロ

マリゴにショートとなり、彼とは袂を分かつことになってしまいましたが、そのまま、就職先も当時ロング派の日フィルとショート派のN響に別れました。その後、有名な日フィル事件でフジテレビと争い、永くて辛かったであろう裁判となって旧日フィルと新日フィルに二分されるわけですが、鈴木清三先生をして「あの時、首に綱を着けてでも引っ張ってくればよかった。」と言わしめ残念がらしめる結果となってしまいました。しかし彼は、あの端正な顔立ちとは反対に実に庶民的な人間であったと思います。その庶民性が、オーケストラ活動の大衆化を目指す日フィルに彼を留めさせた遠因になったにはないでしょうか。そしてその運動は今や大きな成果を上げています。亡くなる前に父上様に「悔いはない」と言ったそうですが、きっと天国でリードを舐めながら自身の来し方に満足していることでしょう。願わくば、迷える我がオーボエクラブを正しく御導き下さいませ様。 合掌

ヤマハ YOB-411

ヤマハからスチューデント・モデルとして新機種が発売されている。「よしあし」発行の関係で内容がすでに古くなってしまったが、さる4月12日に銀座、ヤマハ・アトリエにて若手の会員を中心に試奏会を行った。

ヤマハの説明によれば、この機種の基本となるのは一昨年11月に発売された#811で、管の内径は同じもの。最低限の機能を持たせ、メカニック、音程的にも吟味をし、特に中学生を意識した。この機種を軸に、内容的にも機能的にも改良を重ねて行きたい。とのことだ。

この日の試奏会には8名の会員を予定していたのだが、諸般の事情で、当日参加できたのは山口卓郎氏（洗足学園大卒）、その後輩に当たる卒業したの斉藤潔氏（同）、虎さんとその師匠、お馴染み虎谷迦悦氏、それと私、安原理喜だった。なんだ、けしからん、人選が偏っているではないかとおっしゃるのもごもっとも。でも早い話、この4名のみがこの時間売れていなかっただけのことなのです。

さて、ここからが文章の難しいところ。ほめすぎれば、「あいつらヤマハの回し者だ」と他の楽器屋さんに入出入り禁止を食らいそうだし、けなしすぎれば全国津々浦々、いや、世界のヤマハのオートバイやスキーや風呂オケまでが使いづらなものになってしまう。要点のみ簡潔に、正直に書こう。

斉藤「値段のワリには吹きやすく、親切にできている。」

山口「思ったより音が柔らかい。キーが丸みを帯びているので指が滑りやすい。」

安原「思ったより良い。最低限とは言え、左手Fやトリルキーなどがむしろ多めに付いているので、初心者のために運指表をつけるべきだ。左手Gの小穴は指が滑りやすいので不要だと思う。」

虎谷「充分使用に耐える。バネが全体に重過ぎる。」

以上がそれぞれの勇氣ある発言だった。ところで、この試奏の途中での安原・虎谷氏の会話の再録を試みよう。



虎谷「いろいろキーを省略しているけどね、右手のG#キーは残してるのね。」

ヤマハ「はい、もし取り去るとなれば、G#キーの設計や鋳型の変更が必要なので。」

安原「Gの小穴が残っているのも同じ理由ですか？」

ヤマハ「はい。」

虎谷「でも、何で右手のG#キー

ほどの楽器にも付いているんだらうね。滅多に使わないし、邪魔に感じることも多いのにな。」

安原「確かに。僕自身もこのキーのおかげで大失敗をしていますよ。初心者も無意識にこのキーに強く触れて、音がひっくりかえったりしますね。本人にはその原因が分からないことが多いみたい。」

虎谷「昔から付いているけど、誰かとっばらおうと思った人はいないのかね。」

安原「他の木管楽器にはこれと平行する機構はないですよ。もしかして、古い機構が判断されずにそのまま踏襲されちゃったんじゃないんですか。たとえば人間の盲腸のように。」

虎谷「盲腸、それいいね。何のために使われるのかよく分からなくて、時々事故をおこす。びったりだよ。ね、リキさんそれ書いといてよ。」

と、言うわけで書きました。

安原理喜

編集後記



先日終わったオリンピックを見っておりますと、日本の男子体操チームの若い選手たちの本番強さが印象的でした。期待を背負っているといった気負いも悲壮感も全く無く、実に明るくのびのびと大舞台での本番を楽しんでいて、私も本番ではこうありたいとつくづくうらやましく思いました。でも高校生のオトコノコ達と自分が同じつもりになるにはちょっとずうずうしいかな？ちなみに彼等は「練習の虫」なのだそうです…。

ところで、編集後記を書く人間は変わっても、書くことは全然変わっていないのであります。すなわち、「大幅に遅くなってゴメンナサイ。」 (MIKA)